

おやじ、 ありがとう

37

愚父・慈父・厳父

西和彦

(41歳)株式会社アスキー社長
父・西邦大



'56年2月10日、兵庫県生まれ。早稲田大学理工学部在学中の'77年アスキーを設立。'87年、社長就任。東京工業大学、早稲田大学の講師も務める。

頑固者の父と発作的に行った鳥取砂丘

僕の家は10人近い大家族だったが、子供は僕と妹の2人きり。学校の先生をしていた祖父母をはじめ大勢の大人に囲まれ、甘やかされて育った。だが、父は家族の中で唯一厳しく、怖い存在だった。元銀行員。大正生まれの頑固者。特

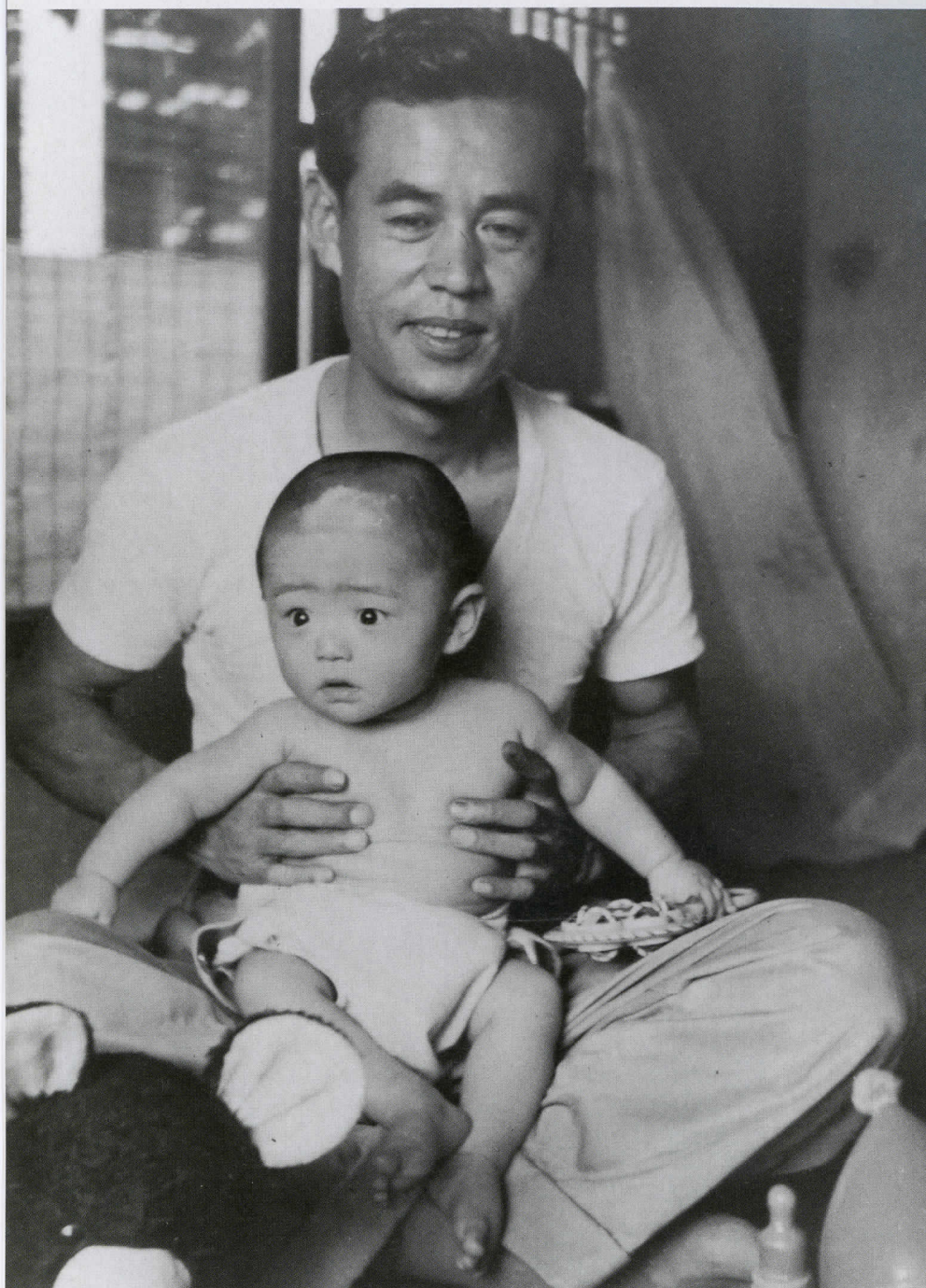
攻隊員の生き残りで、いまでも戦没者供養の寄付や墓参を欠かさないが、そのことはあまり語らない。ある日曜日の朝、父が「お前の好きなおところへどこでも連れて行ってやる」と言い出した。小学4年生だった僕が「鳥取の砂丘が見

たい」と答えると、父は二つ返事で車を出し、神戸の自宅を出発した。到着したのは夕方4時過ぎで、辺りはすでに薄暗くなり、砂丘を見たとは言えないまま、また帰路に。ほとんど車に乗っているだけの日帰り旅行だった。帰り道に、助手席で眠っていた僕が目覚ますと、隣の父は黙々と運転中。その父の横顔を見ながら、「どこでも連れて行ってやる」という自分の言葉を守ってくれた父に、とてつもない頼もしさを感じたのを覚えている。そういえば僕もこの頃、同じような言葉を子供に言うようになった。

父は言ったことや思ったことを、すぐ実行に移す人間だった。そして同時に新しもの好きでもあった。だから、タイプライターや電子計算機やプログラム計算機など当時の新製品をいち早く購入していた。こうした環境や体験が僕の目を世界に向かわせ、コンピュータという仕事への芽を育んだ。

78歳になる父はいまま現役で私立高校の理事長をしているが、これまで心臓病で5回も倒れている。病院に駆けつけるといつも、「何しに来た。帰れ」と威勢がいい。こんな父に「元気でいて……」などと言うと「お前、アホか」と一蹴されることはわかっているのに、こう言い換えようと思う。

「これからも毎年8月15日に鹿兒島・知覧に参拝して、戦友を慰められるよう、ずっと健康でいてほしい」



僕が1歳のころ、父・邦大(38歳)の膝に抱かれて、神戸市の自宅にて撮影